

【座談会記録】

私にとっての韓国・朝鮮の 文学と文化（上）

— 波田野節子氏と白川豊氏との座談会 —

波	田	野	節	子 [*]
白		川		豊 ^{**}
渡		辺	直	紀 ^{***}
柳			忠	熙 ^{****}

0. 上篇にあたって

以下は2023年2月16日に福岡大学とオンラインで行った座談会「私にとっての韓国・朝鮮の文学と文化」の前半の記録である。この座談会では、波田野節子氏と白川豊氏の人生と韓国・朝鮮文学について伺いながら、日本における韓国・朝鮮文学研究の歩みについて話し合った。上篇には波田野氏と白川氏の話を主に載せている。

波田野節子氏は、イ・グァンス 李光洙、キム・ドンイン 金東仁、ホン・ミョンヒ 洪命憲を中心に韓国近現代文学を研究している。代表的な著書は、『李光洙：韓国近代文学の祖と「親日」の烙印』（中公新書、2015年）、『韓国近代作家たちの日本留学』（白帝社、2013年）、『韓国

* 新潟県立大学・名誉教授（朝鮮近現代文学）、話し手。

** 九州産業大学・名誉教授（韓国・朝鮮近現代文学）、話し手。

*** 武蔵大学・教授（韓国文学）、司会およびコメンテーター。

**** 福岡大学・准教授（東アジアの比較文学・思想史）、座談会の企画および後記。

近代文学研究：李光洙・金東仁・洪命憲』（白帝社、2013 年）などがある。

白川豊氏は、^{チャン・ヒョクチュ ヨム・サンソプ}張赫宙・廉想渉を中心に朝鮮近現代文学を研究している。代表的な著書は、『植民地期朝鮮の作家と日本』（大学教育出版、1995 年）、『朝鮮近代の知日派作家 苦闘の軌跡：廉想渉、張赫宙とその文学』（勉誠出版、2008 年）、『장혁주 연구（張赫宙研究）』（동국대학교출판부、2010 年）などがある。

両氏ともに、研究活動の傍ら、韓国・朝鮮の文学作品を日本語に翻訳してきた。波田野氏の翻訳は、韓国・朝鮮文学史において近代長編小説の嚆矢と評価される『無情』（李光洙著、平凡社ライブラリー、2020 年〔初出は 2005 年〕¹）、近代短編小説を構築したといわれる金東仁の小説を収めた『金東仁作品集』（金東仁著、平凡社、2011 年）などがある。白川氏の翻訳は、リアリズム小説の大家とされる廉想渉が韓末から植民地期に生きた祖父・父・子の三代の人生を描いた『三代』（廉想渉著、平凡社、2012 年）、朝鮮戦争（1950～53 年）中のソウルを背景に解放後と戦時中の韓国人の群像を描いた『驟雨』（廉想渉著、書肆侃侃房、2019 年）などがある。

波田野節子氏と白川豊氏が韓国・朝鮮語と韓国・朝鮮研究に関心を寄せた理由には、家族の植民地朝鮮での生活という個人史的な背景がある。波田野氏の父は戦時期に召集され中国・満洲で生活をした経験があり、母は植民地期に^{ラジン}羅津で生活したことがあった。白川氏の父は植民地朝鮮の^{テグ}大邱、^{チヨンジュ}定州で仕事をし、母は^{フサン}釜山の生まれ育ちで戦後になってから日本で生活することになった。波田野氏と白川氏はともに朝鮮戦争が勃発した 1950 年生まれなので、植民地朝鮮での実体験はなかったものの、家庭では親世代の植民地朝鮮の経験や朝鮮（人）へのまなざしを感じ取っていた。白川氏は親の朝鮮（人）に対する態度から「朝鮮に対する偏見とか変な侮蔑感」を感じていたという。親の語る

¹〔 〕は引用者による。以下同。

朝鮮（人）の姿を「いつか行って、確かめようと思った」ことが、白川氏にとっての朝鮮研究のきっかけにもなっていた。

本座談会の冒頭で司会の渡辺直紀氏が触れているように、戦後日本の韓国・朝鮮文学研究は日本人と在日コリアンの研究者が互いに協力し合いながら行われてきた。戦後日本の日本人による初期の朝鮮文学研究は、大村益夫氏、梶井のぼる 氏、ちょう 長 璋吉氏などによって行われ、彼らを中心に「朝鮮文学の会」が結成された。当時の在日コリアンの研究者も（例：安アン・ウシク字植、尹ユン・ハクジュン学準など）韓国・朝鮮文学の研究と翻訳活動を日本人研究者とともにに行っていた。さらにやや遅れて研究を始めた三枝壽勝氏なども登場した。

これら日本人研究者の次の世代が波田野氏と白川氏である。波田野氏と白川氏は、日本の学部・大学院で韓国・朝鮮語の教育を受けて韓国・朝鮮文学を専攻したわけではない。戦後初期の研究者の授業などを聴講して私的に指導を受けるとともに、市民講座などを通して韓国・朝鮮の言語・文学・文化を学んだ。波田野氏の李光洙研究は、李光洙の人生とその周辺の人々や当時の状況などを丹念に調べる緻密な実証によるものとして高く評価されている。波田野氏の実証的な研究方法も、戦後初期の研究者との私的な指導によって培われたものだともいえるが、不動産業をしながら「細かく調べて、徹底的に調べて、債権関係の有無」を調べた経験など、アカデミアの外で身につけたものによるところも多いという。

両氏の韓国・朝鮮文学学習と研究の回想を通じて、1960～70年代の日本の大学では韓国・朝鮮学の講座開設などの学問制度が今とは異なり、アカデミアにおいて韓国・朝鮮学はマイナーな状況だったことが窺える。そうした状況の中で、韓国・朝鮮への関心を満たすために、白川氏は韓国への留学を試みており、また波田野氏は韓国の研究者との連携を強めていたともいえよう。

半世紀が過ぎた今日、当時に比べれば、K-Pop、K-文学などが用いられるほど、韓国・朝鮮への大衆的な関心が高まっている。それゆえ、韓国・朝鮮語の

教育が多く大学において行われている。しかし、今でも朝鮮半島の歴史・文化・社会・文学などの専門教育が受けられる学部・大学院の課程は少ないと言わざるを得ない²。アカデミアにおいて韓国・朝鮮の専門家を育てて社会に送り出すこと、ひいては研究者を育成することは困難な状況でもある。そこで、日本における韓国・朝鮮学は、日本学と中国学などの地域研究との連携と、アカデミアの外との連携が大事であることを改めて感じる。

座談会の語りにおいて Korea は「韓国」「朝鮮」と二つの形で発話されている。波田野氏は「韓国」を主に用いることに對し、白川氏は「朝鮮」を主に使用している印象を受ける。この座談会記録にはあえてそれを統一せず各々の発話を残してある。この名称の違いは、日本の植民地だった朝鮮、解放後の朝鮮半島に韓国と北朝鮮という二つの国家が成立した歴史など、いろいろな背景によるものであろう。Korea を語るとき、韓国に馴染みのある人々は「韓国」を用いるかもしれない。もしくは日本列島と朝鮮半島の歴史や北朝鮮を意識する人々は「朝鮮」「コリア」などの言い方になるかもしれない。〔下編に続く：柳忠熙〕

² 韓国国際交流財団 (Korea Foundation) の「해외대학 한국학 현황 (海外大学韓国学現況)」〔2016～17年に実施された調査による〕によれば、世界的に日本の大学で韓国学関連講座を最も多く開設している (<https://www.kf.or.kr/koreanstudies/koreaStudiesList.do> [2023年12月5日接続])。全体（共通教育の開設を含む）の376か所で共通教育科目として開設されており、学士課程は33か所、修士課程は14か所、博士課程は9か所となっている。全世界における大学の韓国学の課程開設数において、第2は中国、第3はアメリカである。両国は日本と比べて教養科目よりも専門科目および大学院の設置が多くされている。中国は、全体（共通教育の開設を含む）は269か所で、学士課程は206か所、修士課程は36か所、博士課程は18か所である。アメリカは、全体（共通教育の開設を含む）は134か所で、学士課程は94か所、修士課程は26か所、博士課程は20か所である。中国とアメリカの状況と比べてみても、日本の大学における韓国・朝鮮学関連講座は、共通教育が大半であり、専門教育課程を開設している大学は少ない状況である。

【座談会記録〔前半〕】

・戦後初期の日本人朝鮮文学研究者：大村益夫、長璋吉、三枝壽勝

柳忠熙：これから座談会を始めたいと思います。私は、福岡大学の柳忠熙^{リュウ・チュンヒ}と申します。福大韓国学シリーズの国際シンポジウムの進行役をしておりませんが、座談会に関しては武蔵大学の渡辺直紀先生に進行していただきます。今回の座談会では、日本における韓国・朝鮮文学の研究者の生い立ちについて伺います。

ところで、波田野先生、それから白川先生の順番で各自 30 分ぐらいお話いただき、その後にそれぞれのコメンテーターの 3 名の先生方—渡辺先生、^{ファン・ホドク}黄鎬徳先生、^{リ・テフン}李泰勳先生にコメントをいただいた上で、お二人に応答をしていただく予定です。では、渡辺先生、よろしくお願いします。

渡辺直紀：武蔵大学の渡辺と申します。柳忠熙先生のおっしゃった進行に従って進めていきたいと思っています。戦後初期の日本人の韓国・朝鮮近現代文学研究者は、先日 2023 年 1 月にお亡くなりになられた早稲田大学名誉教授の大村益夫先生や、また東京外大にいらした三枝壽勝先生や^{ちょう}長璋吉先生、あるいは大村先生などが中心となり「朝鮮文学の会」に集まった方などのことを言うのではないかと思います。大村・三枝・長先生は、大村益夫・長璋吉・三枝壽勝編訳、『朝鮮短篇小説選（上）（下）』（岩波文庫、1984 年）のような、当時の人たちがよく知る翻訳業績もありました。あえて日本人が中心になってと強調したのは、それまで在日朝鮮人らによる本国（特に北朝鮮）の文学研究・紹介が膨大にあり、あえてそれだけではなくて、日本人が主体的に韓国・朝鮮文学を見て、主体的に選択して読む、というようなことを考えたのだと思います。

では早速、今日のお話をお聞きしたいと思います。プログラムの順番にお願いしたいと思います。波田野先生、どうぞよろしくお願いします。

1. 波田野節子氏「私の来た道とこれからの抱負」

・生い立ちと両親：過去に向き合う

波田野節子：それでは「私の来た道とこれからの抱負」という、皆さんの持ってらっしゃる資料に沿ってお話をさせていただきます。これは白川先生の資料に合わせて作ったものです。

まず「生い立ちと両親」です。父は、新潟県の塩沢町というところの出身で、雪の深いところですよ。父は昭和13年に召集されたんですが、「昭和13年召集」というのは、新潟県出身の田中角栄と同じ年の召集だったというのが彼の自慢でしたので（笑）、よく覚えてるんです。召集されて、除隊後は中華航空に入社。一体どういう会社なのか全然分からないんですが、そこに就職して、中国と満洲にいたそうです。父と一緒に上海に行ったことがあるんですが、上海に出張した時はここに泊まったと、そんな話をして、そのビルを見てきました。そういうことを論文に書いたこともあります。私、この中華航空って怪しいのではないかなと思うんです。阿片の取引か何かやってたじゃないかなと（笑）。農村に阿片を届けた話とか、阿片の吸い方なんかも聞いたことがあって、その時は聞き流していましたが、後で考えると満洲は阿片の栽培が盛んだっただし、どうも何か怪しいなと考えるのですが、父は亡くなったのでもう分かりません。

母は、新潟市の出身です。後で話しますが、最初の夫は満鉄に勤務してラジン羅津にいたらしいですが、その夫が敗戦後にシベリア抑留されて、引き揚げてくるとき光子という名の女の子をなくしたそうです。私がそれを知ったのは大学1年のときです。つまり、父が満洲にいたことは知っていたけれど、母が再



波田野節子氏

婚だったということは全く知らないで育ったわけです。普通の家庭だと思ってました。たしかに普通の家庭ではありましたが、私がフランス語と朝鮮語をやり、妹が東京外語でロシア語をやって、もう一人は慶應で英語をやって、これだけ国際的なのは、やっぱり母と父の影響なんじゃないかなと、後で考えた次第です。

・大学時代と留学：フランス語に出会う

大学時代は1969年に1年生だったので、白川先生よりも1年遅れです。白川先生は早生まれなんですよ。春、大学に入ってみたら、ロックアウトしてました。ロックアウトとは大学が学生に対して学校を閉ざすことです。それで、ぶらぶらとしていたら、母が「ちょっと一緒に旅行しない？」と言って、四国の巡礼の旅に誘いました。何で四国に巡礼の旅なのかさっぱり分らなかったのですが、暇なので夏に母と一緒に旅に出ました。実は母は、この機会に私に再婚のことを打ち明けるつもりでした。何故かというと、昔の知り合いに会うために私に打ち明けておく必要があったからです。そんなわけで、私は突然、母が再婚だったことを知りました。おまけにですね、土佐清水では男性に会ったのですが、朝になってさっさと荷物をまとめてですね、「奥さんに悪い」とか、口走るじゃないですか。私は18歳ですからね、ショックでした。さっぱり分かりませんでしたが、いま思うと秘めた恋なんかもあったんじゃないかなと思います。そのあと四国を巡礼しながら、あっちこっちに行って、昔の知り合いだった女の人に会ったりしました。

ところが、家に帰れば父がいますから、当然のことながらこの話はタブーです。そんなわけで本当に不思議なことに、旅のことは細部まで全部覚えてるのに、その話についてだけは綺麗に忘れてしまいました。記憶喪失っていうのも、いろんな種類があると思います。頭の中では知ってるけれども、正面に出てこない。封印されるという、そんな感じです。

大学4年生の時に、母は脳卒中で亡くなりました。そんなわけで、この話は長い間忘れていたのですが、年を取るにつれて、思い出すんですよね。だんだんと、あのとき母はこう言ったなあと思いだしながら、最後はいったい母はどんな道筋を通して引揚げてきたんだろうかと考えました。いろんなことを総合しながら、自分で想像するのです。私が李光洙^{イ・グァンス}研究を終えたあと、許俊^{ホ・ジュン}と廉想渉^{ヨム・サンソプ}と安懷南^{アン・フェナム}を研究したのは引揚げのことを知りたかったためです。

・不動産屋時代（1977～1993）：韓国語に出会う

大学は青山学院の日本文学科でしたが、高校（旧制中学）の先輩の坂口安吾が行っていたアテネ・フランセ〔東京都千代田区神田駿河台にある日本最古のフランス語学校〕に通って、卒業後はフランスに留学しました。翌年の秋には帰国して京大の大学院にいた高校の先輩と帰って結婚し、それで言語学をやりたいと思って京大で聴講をしてしましたが、夫が新潟の人で、新潟で就職したため新潟に帰ってきました。私は働かないと嫌なので、何ができるかなと思ったら、何もできない。フランス語の通訳の資格は取りましたけど、新潟では役に立たない。それで、とりあえず父が不動産屋だったから、宅地建物取引士の資格を取って、父の会社で働きました。金融なんかもやっていました。

いったいどこで研究方法を覚えたんですか、と聞かれたことがあります。そのときよく考えて、私の研究方法はこの不動産屋時代にルーツがあることに気がつきました（笑）。金融もやっていたから、なかなか大変なんです。細かく調べて、徹底的に調べて、債権関係の有無とかいろんなことを考えなくてはなりません。そうか、これが私の研究方法だと思いました。私は誰かに研究方法を教えてもらったってことはありません。だから、私がやってることは、あの不動産時代にルーツがあると今も思っています。

その時代、私は真面目に不動産屋をやって子どもを育てていたんですが、子どもが小学校に入る前、保育園に入ってしまったらから急に韓国語を学びた

くなりました。何故とよく聞かれるので理由を考えだしました。フランスにいたときスペイン語やイタリア語などのラテン系の人たちはあつという間にフランス語が上達するのを見ていたので、日本語にそんな言語はないかと思って韓国語を思いついたというものです。

新潟に韓国教育院というところがあるので、そこに行って学びました。日本人生徒は3人ほどで授業料は受け取りませんでした。在日の人のための施設で、韓国の小学校の先生が赴任して教えるわけです。それで給料は韓国から出ているとのことで、タダで学びました（笑）。

1983年に秋に突然、知り合いのベルギーの神父さんが病気になる、新潟大学の教養の授業を頼まれました。新潟にフランス語を喋る人が全然いなくて、何でもいいからやってくださいという感じで非常勤を始めたのです。これが大学と縁をもった最初です。資格の項に宅地建物取引士というのを書いたら、これは消してくださいと言われました（笑）。

新潟大学に行きはじめたので、86年から人文学部の糟谷憲一先生から同じ火曜日に朝鮮史を聴講しました。不動産屋は火曜日だけ休みにしていたわけです。そして歴史は肌に合わないというのが分かったので、文学に進みたいと思い、東京外国語大学の長璋吉先生の授業を聴講することにしました。それが87年のことです。火曜日に金曜日は会社を休みました。父親が社長なのでできたことです。翌年、長先生は神田外語大学に移り、入れ違いに三枝寿勝先生がソウル留学後、九州大学の助手から東京外大に赴任されたので、そのまま聴講しました。

あるとき三枝先生と論文の相談をしていると長璋吉先生から電話があり、ちょっと用事で近くまで来たからって言うので3人で会いました。そのときお喋りしながら、本当に今でも不思議だと思うのですが、ふと母が北朝鮮から引き揚げてきたことを思い出してその話を長先生にしたら「それはよく聞いておけばよかったのに！」と言って凄く残念がったので、「ああ、これは珍しい話

なのか」とそんなふうに考えた覚えがあります。だから、忘れてるわけじゃないのです。自己分析ですが、父が生きている間は駄目でした。口から出てこない。

初めての論文が『朝鮮学報』に出たのは1990年のことです。これは東京外国語大学で長先生の授業を聴講しているときに書きました。聴講といってもほとんどいつも2人きりという感じでした。それを書いて「李光洙の民族主義思想と進化論」というタイトルをつけながら、こんなのをよく書いたなと自分で思いました。なにしろ私はそれまで卒業論文しか書いたことがなかったのです。卒業論文は宮本百合子でした。

・大学勤務時代（1993～2014）：韓国の文学研究者との出会い

それから、菅野裕臣先生の紹介で新潟県立女子短期大学に勤務することになりました。そのときも私は運が良かったと思います。四大だったら無理だと思いますが、女子短期大学で、候補が外に誰もいなかったので専任講師になりました。そして、また運がいいことにその大学が新潟県立大学という4年制に昇格したのです。

それで李光洙研究ですけども、1995年ぐらいにちょっと飽きた気がして、李光洙研究をやめ、かねてから予定していた金東仁^{キム・ドンイン}と洪命憲^{ホン・ミョンヒ}を研究しました。気がついたら10年もやっていました。あの頃は忙しい盛りですからなかなか研究ができないのです。いろいろと仕事があるので、だらだらとやってみました。

良かったと思うのは、洪命憲^{ホン・ミョンヒ}研究で有名な姜玲珠^{カン・ヨンジュ}先生という方がいらっしゃるのですが、協力していただいけませんかと声をかけたら喜んで協力してくれました。そしたら自分1人で研究すると全然能率が違う。韓国の文学じゃないですか。蓄積があるんだから、それを使わない手はないと思い、頑張って科研費を取って国際共同研究というのを何回かやりました。

洪命憲研究をやって良かったと思うのは、姜玲珠さんと共同研究をしている

間に、もっと視野を広げなきゃいけない、視野を広げてもう一度李光洙についてやれば違うものが出てくるんじゃないかという感触を持ったことです。前は『無情』だけを中心にしていましたが、それを何ていうか、実証的にやって見たくまりました。^{キム・ユンシク}金允植先生の研究書『이광수와 그의 시대（李光洙と彼の時代）』（한길사、1986年）はすごく細かく書いてあるけれども実証的な部分に物足りなさを覚えていたので、その部分を研究してみたいと思いました。それから同時に、李光洙の後半の人生、特に日本語創作について研究したいと思いました。

李光洙の後半の人生をやったら、当然のことながら、前半ももう一度見直すことになります。そして、これをやったことで李光洙の評伝（『李光洙』、中公新書、2015年）を書くことになりました。『李光洙・『無情』の研究』（白帝社、2009年）を読んだ中央公論の白戸直人さんから、何か書きませんかと声をかけられたのですが、彼はとてもいいことを言ってくれました。小さい本にしてコンパクトにまとめるのも1つの方法だと。詳しく書いていたら、私にはちょっと無理だったと思います。それで、さて書こうと思ったら、大学の方が忙しくて書けない。それで2年早く退職しました。

・今後の計画

次の「今後どうする」に入ります。退職してから8年間、本当に楽しかった。自分の好きなことを書き、自分の好きなことを研究して、それで翻訳なんかもやる。大村先生が倒れたことはショックでした。大村先生は最後の最後まで、本当に最後まで仕事しておられた。^{キム・ハクチョル}金学鉄の小説を訳してるという話をしておられた。大村先生のように死ねたらと、私はちょっと羨ましいです。あんなふうに、最後の最後まで仕事をする脳がはっきりしていたらと。辛いですが、もう1人思い出すのは宮田節子先生です。宮田節子先生は、最後—まだご存命ですけども〔宮田節子氏は座談会後の2023年9月に亡くなられた〕、最後に会っ

たときはすごく寂しそうでした。記憶がどんどん薄れていって、自分のやることに自信が持てなくなっていっちゃいました。それを思い出すと、寂しくて仕方ありません。どっちになるか分からないですよ、人間なんて。だから、あんまり考えないようにして、仕事ができればいい、できなかったらこれも運命、と思ってやることをやる。というわけで、今は『혈의 누 (血の涙)』を翻訳中で、それからできたら金学鉄、大村先生がやってた人を研究したいなと考えております。

渡辺：波田野先生、ありがとうございました。では、引き続き、白川豊先生のお話をお聞きしたいと思います。よろしくお願いします。

2. 白川豊氏「私と韓国・朝鮮の語文学」

白川豊：여러분, 안녕하십니까〔皆さん、こんにちは〕？お疲れのところ、あと30分我慢してください（笑）。私、予行演習してみたんですけども、33分かかったんですよ。3分減らすためちょっと早口になるかもしれないです。よろしくお願いします。



白川豊氏

今お話しになりました波田野先生とは、
トンガブ
同甲、同い年なんです。私、早生まれなので学校入学は1年早かったですけど。先生はフランス語をやっておられたり、結婚されて子育ても大変だということで、朝鮮文学畑に入ったのは私の方が10年近く早いんですけど、すぐに追い抜かれてしまって現在に至っております。そういうことで、もちろん敵かないませんけれども、変なライバルなんです（笑）。さて、私の朝鮮語文学関係の4、50年の中には、特に若い方々には初耳

のこともあると思うので、それをお話ししようかと思います。

・生い立ちと両親：植民地朝鮮での生活と引揚げ

さて、レジュメに書いてある順番でお話をしますので、まず「生い立ちと両親」です。私の両親はそれぞれ朝鮮に行ってたんですよ。これが私の原点にやはりあるのかなと思うんです。父は香川県の出身で、親父の親父つまり祖父は郡役所勤めでしたから、まあ公務員なんです。昔は兄弟が多いですから、学校を出ると皆自分で食べていかねばなりませんでした。うちの父は商業学校を出て、京都の呉服屋で^{でっち}丁稚奉公をしていたんですが、将来の展望も特になかったようです。その父には先に朝鮮鉄道に就職をしていた兄貴がいて、「朝鮮に来い、外地手当が出るから収入が増えるぞ」というのです。それで朝鮮に行ったらいいのです。私が聞いたところでは、最初は大邱^{テグ}ですね。それから最後は北朝鮮^{チヨンジュ}の定州の方で駅員をやっていたんです。駅員と言いますが、商業学校を出てソロバンができるもんだから、主に会計係をやっていたようです。会計をやっていたから朝鮮人と日本人の月給が違ふと知って、「同じことをしているのに、かわいそうだった」と言っていました。日本人の場合には、外地手当が出ることもあるんでしょうけど、3割4割違つたらしいんです。父は父なりに、日本人と朝鮮人、違ふんだという意識を持っていたと思うんです。

そんな中で1939年、定州で召集令状が来てしまったんです。家のアルバムに当時の写真が残っています。〈白川玉喜君応召歓送会〉という写真です。そして中国戦線に投入されたそうです。兵卒でしたが突撃兵じゃなくて、^{しちよう}輜重隊といってですね、馬で弾薬とか食料などを運ぶ係だったんですね。ただの兵卒ですから、どこに行くのか聞かされない。いろいろと想像はするんだけど、いつの間にか鴨緑江^{アムノツカン}を越えてですね、どこまで行くんだろうと思ったら結局、最後は揚子江の近くまで行つたらしいんですよ。軍隊手帳がありますから、一応日記みたいにして、分かったことは書き留めておいたみたいですね。

ところが、いわゆる敗戦、終戦になりましたので、軍隊は解散となり帰ってきたんですが、うちの親父もちゃっかりしたところがあります。朝鮮半島側に入るやいなやですね、朝鮮鉄道に勤めていた時の制服を手に入れてそれを着て、「どうもご苦労さんです」と敬礼しながら、釜山^{プサン}までタダ乗りしてきたらしいです。そして釜山から引揚船に乗って博多港に来たそうです。博多港で上陸する直前に、隣にいた誰かが「あそこにアメリカ兵がいる」と言って、「軍隊関係のものを持っていたら連行されるぞ」と言っただけらしいですよ。親父はものすごく悩んだんだけど、それまで大事にして日記代わりにつけてた軍隊手帳を博多湾に捨てたんです。その後ずっと悔やんでましたよ。「あれがあったらどこに行ったか分かるのに」って。で結局、上陸したんですけど何も調べられなかったそうです（笑）。がっかりしちゃって。そんなもんですね、それが彼の前半生。それから香川県に戻ってですね、またツテをたどって法務局で登記の仕事をやることになったんで、要するに祖父の代から公務員に縁のある家系なんですかね。

一方で母親の方はですね、こちらはもっと朝鮮と関係が深いんです。やはり香川県出身で、祖父は香川県で農業をやってたんですが、なかなかうまくいかず、田畑を売り払って朝鮮に行って一旗揚げようと決意したらしいんです。それで釜山に行って家を建てて、貸家業ですね、賃貸した収入で暮らしていたようです。そこで生まれたのが私の母なんです。だから母は第一の故郷が朝鮮なんですよ。今で言えば高校、当時の高等女学校時代に修学旅行で1回だけ日本（内地）に行ったそうです。それで21、22歳まで朝鮮暮らしでした。母はですね、学校の先生になりたいと思うようになり、釜山高女の卒業後、ソウルの京城女子師範の1年間だけの速修コースに入ったそうです。朝鮮人の友達もいてですね、今も残ってる写真を見ると、その友達と衣服を交換して、うちの母がチマチョゴリを着て、向こうの友達が着物を着ている写真も残ってるんです。で、釜山で国民学校（小学校）の教師になったのですが、生徒の中に朝鮮

人がいるので、週に1回朝鮮語の講習があったらしいんです。ところがそれを馬鹿にして全然勉強してないんですよ。ある時、私が「母さん、朝鮮にそんなにいたんだったら、朝鮮語少し分かるんじゃないの」と言うと、「いや覚えてないけど、煙草をタンベとか言うんだよ」と。なぜタンベだけ記憶に残っているのか不思議ですが。

父と母は香川県出身の引揚げ者同士で見合い結婚をして1950年に私が生まれました。両親とも良くも悪くも朝鮮と非常に関係が深かったはずなのですが、当時の父や母はやはり植民地時代の人間ですから、どうしても朝鮮に対する偏見とか変な侮蔑感があるんですよ。そんな両親の朝鮮体験を私は時々聞かされながら育ってきたわけです。母は顔をしかめながら「キムとか言うんだよ」と「キ」を激音風に発音して嫌な顔をしてね。朝鮮人には品がないと言いたそうにするのです。友達もいたのにおかしいなとは思いますが、私も行ったことないから反論できない。いつか行って、確かめようと思ったものです。それが私が朝鮮関係をやるきっかけの一番根本にあるような気がしています。

・大学入学と朝鮮語との出会い：新日本文学会の朝鮮語講座と「朝鮮文学の会」

さて、私は香川県での18年の後、1968年に大学に入学したのですが、高校卒業まで四国から出たことがなかったんですよ。修学旅行があったはずなのに、私の出身高校はですね、当時は男女で区別してたんです。「男子は勉強だけしておれ、女子だけ修学旅行に行け」というのです！だからもう私は東京に行きたくてしょうがないから、関東の大学を目指して幸い東大に通ったのですぐ上京したのです。しかし喜びは瞬間的でした。さっきの波田野先生のお話と同じく学生による学園闘争の時期だったので、入学後2ヶ月して6月から無期限ストになり授業がなくなったんですよ。私は父の勤務関係の法務省の学生寮にいたんですが、することがないので昼間はアルバイトもやっていましたけれども、語学がちょっと好きだったもので、英語以外の外国語をあれこれやっ

てみることにしたんです。ラジオ講座だったらタダで聞けますから。朝から20分ずつロシア語講座と、それからフランス語と中国語も。まあ全部駄目でしたけども。それなら語順が同じだという朝鮮語だったらいけるんじゃないかと思ったんですが、習えるところが当時はほとんどなかったのです。で、まあ毎日語学講座を聞くぐらいで、あとはアルバイトをして、それからその寮に卓球場があったんで卓球に没頭するようになり、ストが終わって授業が再開しても欠席癖が抜けず、とうとう卒業するのに7年かかり、25歳まで大学生でした。その時点でいくら何でも普通は就職でもすると思うんですが、それがやっぱり若かったもので、「適当になんとかなる」、「アルバイトで食べていける」と思っちゃって、まだぶらぶらしていました。当時アルバイトは何をやってたかというのと、塾で中学生の英語と国語を担当してたんです。そんなことで飯が食えたわけです。

そんな生活をしながら朝鮮語をやりたいものだと思い続けていた私に偶然の幸運が訪れました。当時、私は寮のある中野に住んでいたんですけども、中野駅前で「朝鮮語講座新規開講」というビラを拾ったのです。それは配ってたんじゃないありませんよ。道端に落ちてたんですよ。白紙の裏側が上になっていたら気がつかなかったはずですよ。しかも運が良かったのは、それが隣駅の東中野に新日本文学会っていうのがあるんですが、そこで始まったことです。よく間違えられるのですが、現代語学塾ではありません。新日本文学会はロシア語講座はやっていたのですが、朝鮮語講座は初めてで、私は第1期生なんです。その時は30人募集で〈入門〉コースからでした。その時の同期生で今も朝鮮文学をやっているのは、朴泰遠パク・テウォンの『川辺の風景』の翻訳などをされた牧瀬暁子さんですね。そして現代文学研究の先駆者の一人である長璋吉先生が韓国から留学を終えて帰って来られて、講師としてアルバイトで担当されてたんです。あの『韓国小説を読む』（草思社、1977年）などでその後有名になられた長先生に初級を習ったんですよ。幸運でした。波田野先生はタダで韓国語を習ったそ

うですが、私は金もないのに毎月 1,500 円ほど払ってましたよ（笑）。だから勉強しなきゃいかんと思ったんですけども、長先生は厳しい方で、入門の 3 ヶ月が終わってもう 1 回担当されたんですけど、初級が終わったんだからって、急に小説読ませるんですよ。短編小説。すごくきつかったです。ほとんど辞書引いて 1 ページ予習するのに 1 時間以上かかったんです。でもそれがよかったのかもしれませんが。大部分 1950 年代の短編小説でしたけども、これがきっかけで隣国の文学にも面白いものがあるんだと分かったんですね。で、長先生に 3 ヶ月 × 2 回、その後はですね、後に富山大の教授になられた梶井 陟^{のぼる} 先生が担当されました。それこそ、朝鮮文学研究の第一世代の先生ですけども、元々東京で都立の朝鮮人中学の理科の先生をしておられた方です。真面目な先生だから家庭訪問に行く時のことなどを考えて、朝鮮語をご自分で勉強して学習書も書かれて、三省堂から 1971 年に『わかる朝鮮語』という本を出されたんです。我々が学んでいる時には本がまだ出てないんで、ゲラ刷りを配って、それを読まされた覚えがあります。未だに記憶に残ってるのは、「도마뱀이 있소」（トカゲがいます）とかね。なんで入門書の単語にトカゲがあるんだろうなあと。それから当時はやはり北朝鮮系の影響が強かったことですね。別に悪気はないと思いますが、北朝鮮関連の例文がありました。「대동강 강물이 흐르고 있습니다」（大同江が流れています）という例文がありましたよ。そんなこんなで、長先生、梶井先生から最初の教えを受けたんですが、お二人とも当時非常に数少ない朝鮮文学の日本人研究者じゃないですか。本当に幸運だったと思います。

ところで朝鮮語学習を 1970 年から始めたんですけども、中級以上を習うところがもうなくて困ってしまいました。その頃、早稲田大学で大村益夫先生を中心に日本人の朝鮮文学研究者が集まって「朝鮮文学の会」というのをやっておられましてね。日本人同士では分からないところを、早稲田大学の語学教育研究所で朝鮮語を教えておられた尹^{ユン・ハクジュン} 学準先生にいろいろ聞いたりしてたよう

です。尹先生はその後、法政大学におられましたが、もう亡くなられました。そこに牧瀬暁子さんが入れてもらえそうだと聞いたみたいで、私にも参加しないかと言ってくれたんです。まだ学生だった私は会員ではありませんが、皆さん優しく、「まあそこに座っていなさい」という感じで1973年頃から受け入れていただいたんです。月に1回ぐらいの研究会でしたが、非常に勉強になりました。これに参加させてもらいながらも、しかしそれだけではやっぱりただ席を汚してるだけになりますから、市民講座仲間の牧瀬さんらと一緒に朝鮮文学の短編小説でも一緒に読もうって話になりました。場所にも困って最初は喫茶店でやっていました。そのうち牧瀬さんが、自分の家を開放するから週に1回来ていいと言われて、新大久保のご自宅に毎週集まっていました。よく毎週集まれたなと思うんです。私は暇だったけど他の人は就職してましたからね（笑）。その仲間というのは当初30人集まった新日本文学会の受講生のうち、中級で残った5、6人が中心でした。しかし、何を読んでいいか分からんわけですね。しょうがないから、結局また尹学準先生を時々訪ねて、分からないところを聞いたり、次に読むべき短編を紹介してもらったりして3、40編読んだんじゃないですかね。で、同人誌を出そうということが後で決まった時に、何を読んだのかという一覧表を載せました。もうよく読んだなと思うぐらい読んだんですけどね。だから、読解力はある程度ついたんですけど、それ以上いかないわけです。話すことはもちろんできない。そこで考えました。当時、長璋吉先生のご自宅が錦糸町の錦糸公園の裏にあって、奥様が韓国の方だったので会話を習いに行ったんですよ。でも、いつまでたってもうまくななくて、「白川さんどうしたの、全然できないじゃない」と言われたのを覚えてます（笑）。週に1回ぐらいやったって全然駄目でしょ。朝鮮語を喋る機会が全くなかったんですから。中途半端でやめるのは嫌なもんだから、もう留学するしかないわけですよ。

・韓国留学（1979.3～85.2）：張赫宙研究の始まりと韓国文人訪問

それで、1979年について留学することになったんですけども、もちろん国費なんかじゃなくて自費留学です。で、昼も夜もアルバイトをやってお金を貯めました。夜は家庭教師でしたが昼間はビルの地下や屋上などの水槽工事をやってましたよ。その両方で貯めて、30万円を持って韓国に行ったのですが、この金は1年ですぐなくなりました。最初はソウル大の語学研究所の韓国語講座に入りました。これはもう非常に小さなところですね。大学院生がアルバイトで教えに来てたような感じでした。クラス分けがあったんですけど、私は一応10年近くやっていましたから、クラス分けで最初から「上級」になってしまったんです。上級に入ると、3ヶ月で追い出されるんですよ。一応、留学ということで1年間のビザが出てたんですが、あと9ヶ月したら帰国しなきゃならない。しかし考えてみると会話なんてものは、授業なんかよりは、むしろ街中でいろいろ喋ってた方がよっぽどうまくなるわけです。それならやっぱり韓国にもう少しいなきゃと思いました。その折にまた不思議ですけど、偶然の出会いがありました。ソウル大で一緒に勉強してたのは、私以外は韓国語ができないから学びに来ていたいわゆる僑胞でした。授業以外の時は私らいつも日本語で喋っていました。ソウル大の喫茶店で日本語でべらべら喋っていたら、そこに後に北星学園大学の教授になった高島淑郎さんという古典文学専攻の留学生が、日本語で喋ってた我々に、「日本から来たんですか」って声をかけてくれたんです。それがまた大きな転機でした。彼に「私が在籍している東国大の大学院に入ったらどうですか」と言われましたが、「私は大学院なんか無理ですよ」というと、大学の卒業証書と面接さえ受ければ入れるというんですよ。当時は指導教授として外国人留学生が欲しい先生が多かったんでしょうね（笑）。しかし私はせっかくソウル大の語研に行ったんだから、ソウル大の国文科に入れないかと思って金允植先生にまで挨拶をして調べてもらったら、国費留学生じゃなきゃ駄目と言われたところでした。そんな時に高

島さんと出会ったのは幸運でした。それに、しかも授業料が留学生は国内学生の半額だったんです。それは成均館大と東国大だけ。この2校だけが留学生半額だった。それも非常に助かりました。

で、東国大で面接をしてくださったのは、高島さんが紹介してくれた
キム・ジャンホ金長好先生という、詩人としては有名な方ですけど、私は当時、知りませんでした。で、講義担当の一覧表を見るとね、有名な評論家で私も名前を知っていた
チョ・ヨンヒョン趙演鉉先生の名があるんですよ。不思議なのは、趙演鉉先生は東国大にも来られていましたけど、その頃は漢陽大の専任教授だったんです。大学院の授業だけ東国大に出講しておられたんです。それがね、なんで指導教授になれたか今でも不思議ですよ。東国大の専任でないのに指導教授なんです。で、私は飛びついて、趙演鉉先生を選びました。でも普通は挨拶をした金長好先生が怒るでしょ。「俺のところに挨拶に来たのに、何で来ないんだ」って。しかし、そこが先生の偉いところです。我慢してくれました。

さて、入学したからには2年後には修論を書かなきゃなりません。一応、日本に留学をした、のちの主な韓国文人を何人か調べてそれをまとめただけなんですけどね。その修論を書きあげて承認のハンコをもらおうと思ったら、趙演鉉先生が11月に台湾に行って東京に立ち寄った時にホテルで亡くなったんですよ。趙先生は『현대문학 (現代文学)』誌の主幹もやっておられたんですが、
ソクチュ号が石斎で、「石斎日記」というのを書いておられました。『現代文学』にこの日記が死後に連載されていたんですが、その最後の日付のところに私の名前が出てくるんですよ。「白川君が来る、論文のため」って書いてあるんです。なんだか涙が出ます。1982年の11月号です。機会があれば見てください。それはそうと、指導教授を変えなきゃならない。金長好先生が怒ってるかなと、恐る恐る行ったんですよ。金先生、優しい方ですよ。何とおっしゃったかという、「드디어 왔군 [ついに来たか]」という一言でした。「何してたんだ!」と言われるかと思ったら、そうじゃなくて本当にありがたかったです。

そうして無事、何とか博士課程に入れていただいたのですが、博論のテーマを早く決めないといけない。悩んでいた時に、これもまた偶然ですけど、^{インサドン}仁寺洞にある^{ヨンチャン}永昌書館という古本屋で、たまたま^{チャン・ヒョクチュ}張赫宙の『嗚呼朝鮮』という本を見つけたんです。日本語で書かれている本をね。古本屋の本には汚いものが多かったんですけど、きれいな本でした。しかも1952年の作品が何でソウルに置いてあるんだろうと不思議に思って買ったんですね。で、買ってその日の晩に読んだらめっちゃくちゃ面白かったんですよ。それはそうだ、日本語で書いてあるから嬉しくもあったんですよ（笑）。一晚ですぐ読んでしまって、こりゃいいやと思って、他の研究とかないのかなと調べてみると、あんまりない。そもそも〈親日作家〉だから、そんな作家はいかんという感じでしたからね。作品も全部知られてない。じゃあちょっとやってみる価値があるんじゃないか、と思って指導教授に相談したわけです。金長好先生が「博士論文、何にするんだ」とおっしゃる。「張赫宙やろうかと思っうんです。研究があまりないみたいですけど」と答えると、めっちゃくちゃ心配されましたよ。「お前、親日作家なんかやって大丈夫かよ」って。「しかもお前、日本人だろ」なんて。日本人にそんな研究されるのは面白くないだろうって、ものすごく心配されたんです。いや、それはそうだけど、別に親日派の批判だとかいうことじゃなくて、「作品を全部集めて分析したいだけですよ」と言ったんです。そしたら金先生、やっぱり優しい方でした。「そんなら、まあいいからやってみろ」って。こう許してくれたから論文も書けたんですね。

そうこうするうちに、6年も韓国に滞在することになりました。その間に、大学院での発表や論文執筆以外にもあれこれやりましたけど、そのうちの一つが文人訪問です。これは、名前もご存知の方もいらっしゃると思っますけれども、^{こうの}鴻農映二さんという方ですね、現在も北九州に在住で翻訳、評論、創作と幅広く活躍している方です。この鴻農さんが先に留学されていて、同じ東国大にいたんですね。専攻が同じ現代文学でした。彼が「元老文人を訪問してイン

タビューしたら面白いんじゃないか」って提案したんです。韓国人もあまりやってないはずだということで、やってみようということに2人で話し合って、朴鍾和先生とかですパク・ジョンファね、白鉄先生とかベク・チョル高齡の方から順に訪問することになったんです。後から留学先輩の芹川哲世先生（すでに首都女師大〔後の世宗大〕で助教授）なども加わって、3、4人で行きましたけど、すべてに参加しているのは私と鴻農さんだけなんです。しかし、どこの馬の骨かも分からないような日本人の学生がですね、よく訪問なんかできたと思うんですよ。実はこれもやはり、東国大の先生方のおかげなんです。すごく斡旋してくれました。趙演鉉先生、まだお元気なころでしたから紹介状を書いてくれたんです。これがまた韓国語で面白いんです、「学生が行きます、善導を頼みます」というふうに、「善導」をしてくれと。まあそういう紹介状を書いてくれて。それから、東国大に出講しておられた詩人の徐廷柱先生ソ・ジョンジュですね。徐先生の授業を毎週受けていましたから話をしたらですね、「私が電話してやろう」と言ってくださったんですよ。徐廷柱先生が電話したら、そりゃあ受けるでしょう。怪しい奴らじゃないから、ということで、ものすごく助かりました。もちろん事前の連絡はしっかり入れましたけれども、そんなことで怪しまれずにいろんな方にお会いすることができたんです。合計してみると、なんと1980年から81年にかけて20何人が訪問してるんですけど、そのうちの半分ほどはですね、これまで活字化したものがあります。活字化してない文人があるので、これは今度ですね実は九大の韓国研究センターの年報に残りの11人について、エッセイですけれども書くことにしました。訪問者のリストも一覧表にしてあります。4月になったら出ると思います〔『年報』23号、韓国研究センター、2023年3月20日に発行済〕。いろいろインタビューした聞き書きを最低、残してはあるんですが、これを何とかまとめなければ、というのが今後の課題なんです。

・九州大学朝鮮史研究室時代（1985.4～89.3）：九州で朝鮮語を教えはじめる

時間があまりないので、その後の話をします。韓国留学時代まで話しましたが、その次は帰国以後の「就活」関連の話になります。その前の留学時代に文人訪問などで知り合った今のかみさんと結婚したんですけども。もう30歳過ぎてまだ学生をやっていたもので、彼女の実家に挨拶に行ったらお父さんにもすごく怒られましたよ。「まだ学生やってんのか、働け」と言われて。しょうがないからソウル郊外にある漢陽大の日文科で2年間日本語を教えました。が、日本で何かないかと探しました。と、たまたま九大の助手のイスが空いてたんです。もしこれが北大だったら北海道に行っていましたね。九州でよかったですよ、韓国が近いからしょっちゅう行けるでしょ。本当に感謝しています。

これは、さっきは触れなかったんですけど、1972～73年頃に大学で朝鮮語を習っていた時に受講した、最近亡くなった梅田博之先生という東京外大の先生からの情報でした。当時、東大にやっと「朝鮮語」が開講したんです。第三外国語扱いなので別に受講しなくてもいいんですけども、あの有名な梅田先生が担当されるのだったら当然、受講しなきゃと思いました。梅田先生はその後、1984年に始まったNHKテレビの〈ハングル講座〉で初代講師をされた方です。初級からやるのに単位にもなるので一石二鳥でした。けれども何より先生に毎週質問できるのが楽しかったんです。私も意地悪なところがあり、そんな偉い先生だから困らせてやれと思って、先生も分からないような質問をしてやろうと考えたりしたんです。先生に、「대단히とか꼭とか굉장히とかあるでしょう、どう違うんですか」って。先生は困られて、「それは日本語でもね、大変とか、とてもとか、非常に、ってあるじゃない、それと同じようなものだよ」と。まあそんな感じで毎週困らせてたんです。でも単位ももらえましたよ。面白いから次の学期にも行ったら、「君、もう来なくていいよ」と言われたんですが、無理やり入れてもらいました。梅田先生は本当に面白い方です。「単位がいるんだったらレポートを出せ」って受講生に言うんですよ。ところがそ

のレポートというのが未だに忘れられません。黒板にいきなり朝鮮語で1センテンス書いて、「これを訳してハガキで送ってください」とのこと。葉書って当時7円ですよ。今は63円でしょうけど、当時、5円から7円に値上げしたばかりでね。私はその7円が惜しいから授業中に隠れて内職をして、授業が終わってすぐ提出して7円得しました。その梅田先生が、九大の朝鮮史の助手のイスが空いてるって言うてくれたから、九州に来れたんですね。

この講座の主任教授は長正統先生おさ・まさのりという方でした。九大の朝鮮史研究室、ご存じの方も多いと思いますが、正式には朝鮮史学講座ですよ。歴史学なんです。ところが教授1人と助手しかいない講座でした。長先生が偉いのはこの先生の方針から窥えます。この講座では朝鮮学を幅広くやりたい、だから助手には歴史学以外の者を雇うとのことでした。だから初代の助手が朝鮮言語学で、後の東京外大教授になられた菅野裕臣先生かんのでした。第2代以降もほとんどが歴史学以外の方でした。文学の三枝壽勝先生が私の2代前なんです。そんな感じで広くやってくれていたのはいいんですけど、いくら何でも朝鮮の歴史をよく知らない私でしたから、ものすごく緊張しましたよ。学生に馬鹿にされるんじゃないかって。歴史を知らないのに歴史学科の助手とは！「何をやっていいんですかね」と伺うと、「適当に雑用と朝鮮語でも教えてくれればいい」と言われて助かったんですけども。当時、今ありませんけど、六本松に教養部があって、そこで第三外国語科目に〈朝鮮語〉があったんです。そこで歴代の助手が教えてたので、私もそこで教えることになりました。その時のお弟子さんもみんな偉くなられてね、韓国研究センターの副センター長をやってる人もいますよね。やりがいはありました。そしてここでの4年間のうちによりやく博士論文を提出することができたんです。

・九州国際大学時代（1989.4～94.3）：コリアコースの教員となる

しかし助手というのは4年という年限があって、それ以上いられないんで

す。次にこのポストを待っている人がいますからね。また困ってしまって、就活をしている最中に長正統先生がご病気で亡くなったんです。しかしその奥様・長節子先生もやはり朝鮮史の専門家で、いろいろ紹介してくれたんですね。北九州の八幡大学が九州国際大学と名前が変わって国際商学部というのができ、そこに 코리아 コースができるらしいと教えてくれたんです。1989年の春に赴任してやりがいがあったのですが、負担になったのが夏1ヶ月間、学生引率で釜山に研修に行かなきゃならないことでした。東亜大学。それも3、4人だったらいいんですが、学生が40人いるんですよ。一つのコースに。当時はね、K-POPのはやる前の時代でしたから、ほとんどが男子学生だったんですよ。これも変な話ですけど、女子学生がどうしていないのかと聞いたら、北九州近辺では女の子が朝鮮学なんかやったらお嫁に行けなくなると言われてたんですよ！そんな時代でした。男子学生ばかり連れて行って、東亜大に迷惑になるようなことがあってはいけなくて班編成をして10時門限にして点呼を取ったんですよ。班長は皆、「異常なし」という。しかし、念のため調べてみたら、帰ってきてない奴がいるんですよ。こんなことやってられないのは、夏休みには勉強をしなければならないのに、毎年引率で1ヶ月潰れるんです。

・九州産業大学時代（1994.4～2020.3）：朝鮮文学を教える

で、また密かに「就活」をしていたところ、やはり長節子先生から福岡の九州産業大学で、国際文化学部が新しくできるから来ないかと誘っていただきました。私、新しくできるところばかりに行ってるんですよ（笑）。だから学部の1年生から教えることになりました。ただ最初は韓国・朝鮮関係のコースはなかったんですが、私は初めて〈朝鮮文学概論〉を担当しました。それまで担当科目は語学と文化論ばかりでね。これ幸いと定年まで、26年間勤めることができました。

ところが、私がやめる数年前からですね、大学当局の方で「もうアジアはい

らん」とか言われ始めたんです。1994年に国際文化学部ができた時に対外的には、21世紀はアジアの時代だからアジアを中心に国際文化学部を作ると言っていたんですね。ところが、2015、6年になると大学当局の方で、「いやこれからは英語の時代だから」とか言い出して。そんなことを今頃言って…。「英語をやってる学校はいくらでもあるんだから、特にうちでやることもない」と、私も学部長をやっていた時だったので非常に反対したんですよ。だけど結局押し切られてしまって、やっとできていた〈アジア文化コース〉もなくなってしまったんです。ここにおいで李泰勳先生も非常に苦労されたと思うんです。朝鮮の歴史の授業科目などなくなってしまったから「韓国人の先生は韓国語を担当したらいいんだ」と言われたとか。酷い話です。私はちようどうまい具合に、直接の被害を受ける前に退職を迎えたんでね。これも非常に幸運でした。

・張赫宙と廉想渉研究

そんなこんなで、私は何をやったかという話の、文学以外の話ばかりしてしまったんですけども、文学研究関連では結局、張赫宙と、その後、廉想渉という文豪二人が中心でした。

最後にそこだけちょっとお話しします。張赫宙研究が一応終わったので、やっぱり本格的に韓国の作家をやりたいと思ったんですね。読んで一番面白かったのが廉想渉だったんですよ。で、確か1997年に富山大で朝鮮学会があったと思うんですが、その時に廉想渉の1930年代の長編小説について発表したんですが、司会をしてくださったのが何と大村益夫先生でした。大村先生が、「発表者の紹介を簡単にします。白川氏は朝鮮文学の研究、という朝朝鮮文学の周辺をやっている方です」とおっしゃった（笑）。いや、張赫宙をやったのは事実だけど、今回は廉想渉をやるのになんで周辺と言うんだと。ガックリきて、それなら廉想渉研究をずっとやってやろうと思ったんです。大村先生にある意味感謝してます。いや、先生に悪気はありませんよ。張赫宙をやったと

いうことをおっしゃりたかったんでしょう。それで私、その後もずっと廉想渉をやることになったのかもしれない。

・これまでの人生を振り返ってみて

で、まあちょっとごちゃごちゃ、訳の分からん話ばかりしましたけどね。一貫してるのは、偶然が非常に多かったことです。偶然が非常にうまく作用したんですね。人生はそんなものなのかもしれませんが、偶然が多いじゃないですか。生まれたこと自体が偶然ですからね。それは選べないわけで。それをどう生かすかということです。だから何か急に意外なことが起こったときに、その価値を瞬時に見極めて、そんなものはもう意味がないから捨ててしまうのか、キャッチするのか、それが非常に重要だと思いました。大事だと思ったことは偶然でもいいからとにかくキャッチをして、それをもとに広げていく。それが人生で一番大切なことだなということを改めて感じています。

結局、時間をオーバーしてしまいましたが、ご清聴どうもありがとうございました。

〔下篇に続く〕

※本座談会原稿作業は科研費（基盤 B）20H01252 の助成を受けて行ったものである。当日の座談会を録音した内容を文字に起こしてくださった高橋梓（新潟県立大学・講師、韓国・朝鮮近現代文学）氏にお礼を申し上げる。